

# 諏訪小だより

令和4年10月31日

11月号

多摩市立諏訪小学校

校長 齋藤 幸之介

「多様性を認める」に近付くために

校長 齋藤幸之介

過日行いました運動会には、多数御参観いただきまして誠にありがとうございました。天候にも恵まれ、予定された内容を全て行うことができました。3日後の全校朝会では結果を発表しました。勝った紅組は大いに喜びましたが、その横で、勝者に拍手を送る白組の子供たちの公正な姿に、本校の子供たちのよさを認めることができました。今後共本校の教育活動に御理解と御協力を賜りたく存じます。

## 「アンコンシャス・バイアス」一人権研修会から学んだことをきっかけにしてー

今回のテーマについて述べるにあたり、偶然ですが、朝日新聞10月27日(木)の朝刊に「他者認める感性 教育の場で」という記事を見付けました。林香里先生は、一見すると日本の社会は、礼儀正しく、街も安全である「なめらかな社会」である一方で、「異なる生き方をする、あるいはせざるを得ない人たちを冷酷に弾き出す」ような圧力が働いているのではないかと指摘しています。この元にある考え方は、多様性、最近よく言われる「ダイバーシティ」です。

昨年度同様、本年度も東京都教育委員会主催の一人権研修会が行われました。その際のテーマは「アンコンシャス・バイアス」でした。アンコンシャス、つまり無意識のうちにもっている先入観です。男性はこうあるべき、女性はこの職業には向いていない、などという、固定的な見方がありますが、多様性を尊重するからこそ、「自分はアンコンシャス・バイアスをかけているのではないかと振り返る必要があるのかもしれない。

## ジェンダーフリーから考える

このことは、ジェンダーフリー、つまり、「男らしい」「女らしい」というイメージにとらわれずに一人一人の資質や能力を生かしていく、という考え方にも通じます。

口幅ったくなくて恐縮です。ジェンダーとは今述べた「らしい」といった社会や文化のなかで意識される、性に関する社会的規範であります。しかし一方で、「性自認」、つまり「自分が自分の性別を何と考えている

か」という側面もあると言われていきます(渡辺大輔「中学生の質問箱 性の多様性って何なんだろう?」2018年、平凡社)。

小学校教員でもある岡崎勝先生は、社会学者 宮台真司先生との講演の中で、男子と女子の違いを述べながら、次のように説明をしています。「(だけど)体とは別に、心の違いもあるんです」「じつは男と女ってはっきり分けられなくて、両方がつながっているのが、たまたま男になったり女になったりしているだけみたい」(岡崎勝 宮台真司 編著「実録 愛と希望を語る90分 こども性教育」2022年、ジャパンマシニスト社)。子供たちには難解な説明かもしれませんが、このことは「異性を好きになるだけではない場合がある」につながっていきます。アンコンシャス・バイアスをかければそれが差別にもつながること、またこのことは一人一人の心のことであるから「デリケートなこと」である、と読み取ることができます。

## 「デリケートなこと」をどう捉えていくかー道徳授業地区公開講座に向けてー

これからの子供たちは、今以上に多様性を深くまた広く捉えながら一層多くの人々と関わっていくことになるでしょう。東京都でも、明日11月1日より「東京都パートナーシップ宣言制度」が運用され、より多くの人が活躍できるように職場環境を整備していくこととなります。

例えば、渋谷区では「渋谷区男女平等及び多様性を尊重する社会を推進する条例」が施行されています。現状では婚姻関係にはなれないけれど、パートナーとして必要なことを叶えるための条例です。たどっていけば「多様性」をどのように認めていくか、ということにもなりましょう。

コロナ禍で制限をかけることにもなり、今年度は5・6年生のみを対象としましたが、渋谷区のこの条例を成立させるためにお力を発揮された 諏訪の森法律事務所弁護士 中川重徳先生にお越しいただき、子供たちに理解しやすいように御講演をいただきます。保護者の皆様にもぜひ御参観いただきたく存じます。